

各期の標準時数下は、子どもの生活に合っていたか？

本来であれば子どもの意見を聞くべきだが、一人の子どもが1学年で経験できる時間割は一種類である。対して、長く現場にいる教員は、教歴の中でさまざまな教育課程を経験し、子どもたちの様子を体感しており、大きく相対的な評価が可能である。ここでは、4回(4期)の学習指導要領改訂を経験した公立小中学校教員の回答をまとめた。

小学校：4期経験487人の回答 中学校：4期経験251人の回答

1989年～(週6日制)



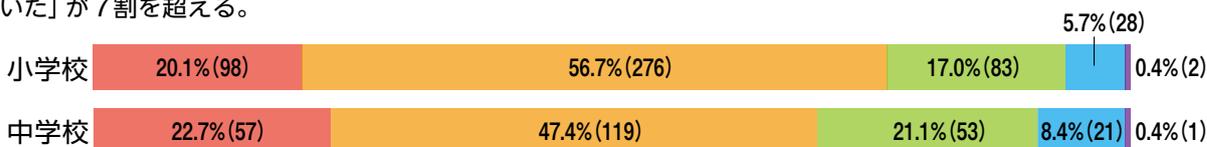
小学校(6年)5時間



中学校(1・2年)5.4時間

第1次ゆとりの標準時数を踏襲。

4期を経験している小学校・中学校の教員の実感として、この頃は子どもの生活に「合っていた」「やや合っていた」が7割を超える。



凡例 ■合っていた ■やや合っていた ■やや合っていなかった ■合っていなかった ■無回答 ()内は回答人数

1998年～(週5日制)



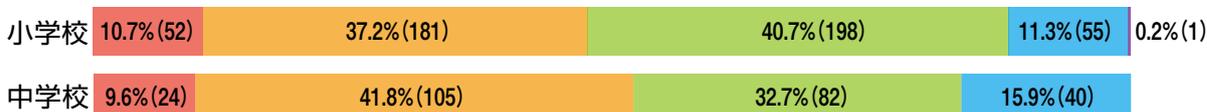
小学校(6年)5.6時間



中学校(1・2年)5.8時間

いわゆる「ゆとり教育」、第2次のゆとりの学習指導要領で、週5日制、総合学習の時間が導入された。

それまで週6日でやっていたことを5日でやるには、時間数についての削りこみが不足。平日1日時数が増加したが、教育界全体としての議論とはならず、大きな課題と認識されたわけではなかった。現場教員の実感としては「合っていた」「やや合っていた」という肯定的な評価と、「合っていなかった」「やや合っていなかった」という否定的な評価が拮抗している。



2008年～(週5日制)



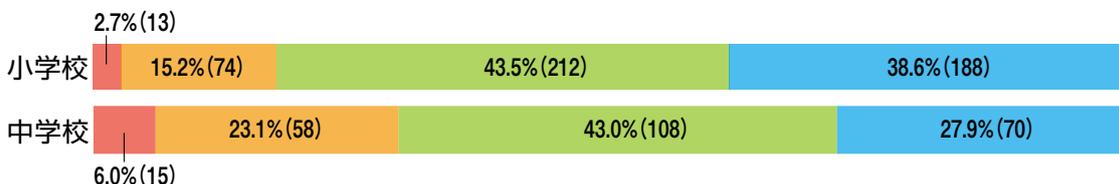
小学校(6年)5.8時間



中学校(1・2年)6時間

小学校で外国語科が導入。

「肥大なカリキュラム」と批判された当時の時数へ逆戻りしており、評価がはっきりと逆転。「合っていなかった」「やや合っていなかった」が7割を超える。



2017年～(週5日制)



小学校6時間



中学校6時間

小・中学校とも平日1日時数が6時間に。

週5日毎日6時間という状況で、小学校については子どもの生活に「合っていなかった」「やや合っていなかった」が9割となっている。

